

# 船団

第123号

特集

俳句とリズム

[ 連載 エッセイ ]

- 4 日本語ノート⑦まじ! 森山卓郎
- 
- 6 今日の川柳④⑧ジャンルの未来 芳賀博子
- 
- 8 私と俳句⑬ヘンテコリンな絵 高木貞重
- 
- 10 映画に恋して、俳句に恋して⑬社会派作品について 衛藤夏子
- 
- 72 不器男の森から④(最終回)不器男が眺めた風景を追う 川嶋健佑
- 
- 74 俳句フォーラムin松山2019 河野けいこ

[ 書評 ]

- 76 船団の会編『朝ごはんと俳句365日』 野住朋可
- 
- 78 中原幸子句集『袖子とペダル』 松永みよこ

[ 評論 ]

- 80 時代と文脈から読み直す⑨  
「第二芸術」?の桑原武夫? 鈴木ひさし
- 
- 90 会員作品
- 
- 130 今号の15句 小枝恵美子・坪内稔典・鳥居真里子・火箱ひろ・芳野ヒロユキ
- 
- 136 エンジンルーム

表紙・カット/山本真也 レイアウト/松山たかし・阪脇幸夫

[ 特集 ]

# 俳句とリズム

- 30 俳句の「切れ」とリズム 木村和也
- 
- 34 下五は勝負どころ 坪内稔典
- 
- 38 口ずさむように 小川弘子
- 
- 40 俳句の基本調味料「リズム」 佐藤日和太
- 
- 42 白いリズム 藤井なお子
- 
- 44 みずみずしいぞ、オノマトベ(擬音語・擬態語) 原 ゆき
- 
- 46 リズムを調べる 藪ノ内君代
- 
- 48 短歌と俳句のリズム「破調」 秋月祐一
- 
- 12 俳句30句 植田かつじ・尾野秋奈・甲斐いちびん・  
川上 馨・つじあきこ
- 
- 22 俳句12句 内橋可奈子・村上ヤチ代・東 英幸・藤かおり・  
福岡貴子・佐藤香珠・藤田亜未
- 
- 52 小説 あらるげ物語 松山たかし

平 きみえ

夏の雲お風呂で出合うおばさんだ  
夏の雲まつ毛を増やしてから事件  
ゆく夏の歴史数学理科とキミ  
蚯蚓なくそれはそれとし私が悪い  
百日紅腰をくの字に動かして  
新涼の男なんだかカリヨンへ  
露草や青い恋してモーロクは

高田 留美

百日紅相談事は三つまで  
八月の一人ひとりに祖母の唄  
九階へエレベーターは蚊をのせて  
麦チヨコを一気に十粒秋に入る  
口角を上げたり下げたり鳳仙花  
涼新詩人になるとしたら今日  
隣人に哲学のある流れ星

知念 哲庵

色悪におひねりの雨村芝居  
L O N E L Y とビスケット積む夜の秋  
縄文人君も呑んだか猿酒  
凶作やむかし身売りの話など  
新任の人事部長は寵馬  
先のこと煩ふ無かれ月夜茸  
付度し改竄し栄転の秋

つじ あきこ

シャープですかフラットですかそれとも鵞  
いわし雲背丈というよりも背中  
リュウグウノツカイになれず秋の金魚  
貯金箱みんな空っぽ涼新た  
妹と母と私と林檎むく  
モノクロの「ひろしま」八月が終わる  
雲は秋向こうの岸に小学校

●会員作品●

谷 さやん

鬼胡桃青くて雨はやみそうで  
海の日の砂にイーゼル立てたきり  
理髪店出る胸板へ蟬の尻  
もう少し声を落とせよ雲は秋  
ツブラジイまでめきめきと枝踏んで  
しゃっくりに胸をたたくよ梨の前  
草の花女子も男子も四股を踏む

千坂 希妙

筍を三本脱がしアンコールワット  
立ち泳ぎして放尿すごめんなさい  
午前二時ゴキブリ歩くアスファルト  
ぼうふうらよわれも人生棒にふる  
見せブラも夾竹桃も白がいい  
すってんてんオケラ街道おけら鳴く  
子規よりも倍ほど生きて吊し柿

辻 征雄

おーい蛸大海原に引つ越すか  
海月浮くアルキメデスの呪文かな  
炎天の聖火ランナーに応募する  
麗子像水彩もあり虹消える  
七月尽ディープ子を残し安楽死  
原爆忌甲子園にて応援す  
おせいさん抹茶ソフトの読後かな

津田 このみ

青梅雨の足裏やわらかフラダンサー  
河童忌の回転寿司の海苔へなへな  
夏休み太陽に目鼻ないですよ  
夜の噴水足音が近づいてくる  
遠雷と爪の大きな男かな  
枇杷食べてすぐ靴下を脱ぐ男  
夏草のつんつん当たる逢瀬かな

●会員作品●

土谷 倫

柿の花母の初恋聞かぬまま  
白靴に去年の汚れ残りをり  
「実はいま」と切り出す人と夕端居  
オムレツをぼんと返して夏の月  
無花果のほひの風や夜の秋  
赤いボタン堤に拾ふ晩夏かな  
壁打ちに余念無き子よ晩夏光

十一

短夜や世界は朝に終はるだらう  
ドローン飛ぶ空擦り切れて明易し  
海沿ひの駅舎にカモメ舞ひ降りし  
栈橋に立つ中年の缶ビール  
ONEWEYの矢印似合ふ夏の道  
強き音のパイプオルガン梅雨の明け  
トースターにフオークさしこむ炎暑かな

中原 幸子

父母元気ですと八十八夜の香  
AIは無用でんでんむし無敵  
付度のこは地球で六月で  
暴れ梅雨本因坊は8連覇  
きつちりと手抜きは記録されて夏  
もういや、ということふたつ心太  
早稲の穂を風わたりゆく黙示録

長谷川 博

笑笑と手首足首夏に入る  
耳かきとうはうはしてる夏座敷  
若いつてポンだトリスのソーダ割り  
八月の通天閣は揺れている  
独逸的首振りをする扇風機  
飛魚と聴く船上のバイオリン  
時々ハグなんかして竜田姫

●会員作品●

つはこ 江津

長梅雨のながしに立てばモノ流れる  
金網の向こうを点す梅雨の蝶  
風鈴市人香をひとつ捨ててきた  
捨鉢をひろって帰る夏の月  
日盛りの骨がりいんりいん鳴るよ  
犬歯ひとつおいて八月の少女  
土笛をぼーぼーと吹き葉月

坪内 稔典

あんパンと連れ立つ秋の奈良あたり  
あんパンと他力の心あって秋  
雲は秋あんパン一個と自己愛と  
あんパンのある日塩辛蜻蛉いる  
あんパンに言い寄られたよ雲は秋  
あんパンにちよつと言い寄る空は秋  
夢殿へ寄ろう二、三の団栗と

東 英幸

どことなくパンタグラフも梅雨に入る  
臍の緒を切つてから枇杷の木に登らぬ  
黒猫も皿を飛び出す熱帯夜  
ピンクの雨傘を六月の雨には  
アガパンサス日本のあの日のビートルズ  
放流のサイレン蟹の身構える  
耳鼻咽喉科へ風神も雷神も

火箱 ひろ

葉桜の生家夢前川渡る  
藤棚に来て六月のこの昏さ  
考えてみてもやっぱりかなぶんぶん  
白玉などまるめてココロとりもどす  
黒出目金ぱくつと真夜を呑みこんで  
人生をぶらぶら歩く夏帽子  
螺旋階段とんとん夜の底の夏

●会員作品●

陽山 道子

七月のリゾット分け合う老いの家  
海の日の海の音して羽たたむ  
おとといのポンポンダリア物語  
遠花火肩が小さくなったよなあ  
夢に飼う山のかなたの霧のまち  
記憶ゆれ晩夏晩年ガラス玉  
磨崖仏晩夏の日の色風の色

藤野 雅彦

指切りは小指の仕事夕焼雲  
父と行く夜店おもちゃの指輪して  
戦争を知らぬ大人の終戦日  
言いにくいことは西瓜を食うてから  
よく叱られた親父だったな墓洗う  
それぞれの帰る家あり天の川  
「苦勞せえ」が祖父の口癖大根蒔く

芳野 ヒロユキ

ただ今の声で眩しくなる金魚  
本日はズッキーニしているのです  
鯛のリズムその日暮らしリズム  
ががんぼのママうんちって声がする  
夫がねががんぼじみてきているの  
肛門を見せあえる仲鱧の皮  
蛇の舌あの人舌また明日

池田 澄子

恭しく白雨はじまる匂いかな  
字通より重たく汗の嬰兒よ  
蠟石のかの落書の暑さなど  
ペンよりもビールぞ佳けれ灯ぞ佳けれ  
枝豆や坐つたらもう立ちませんよ  
葛の花言うべきことは言いにくく  
逢っていてたまたま月夜でときに風

●会員作品●

村上 ヤチ代

どくだみに犬の糞やら猫の糞  
鼯より調べ宜しき牛蛙  
魔女色の手足のネイル砂日傘  
甚平の開け根性焼き一つ  
八月大名砂蒸し風呂に入る  
折鶴も茄子の馬も手際良し  
美白てふ美容液塗る生御魂

山田 まさ子

一芯二葉一芯二葉夏隣  
たまに分かる単語あったり若葉風  
六十六の六月六日朝の窓  
ハンモック揺れて揺らして引きこもる  
これからは紙の袋へコンチキチン  
八月の曇り時々法螺貝だ  
草原より手紙一通晩夏光

隴 潤

雑種飼う日記も買った遠き夏  
二の腕と笑窪が誘うかき氷  
春の宴抜けて女子らは喫煙所  
園児らのリヤカー集う春の陣  
春愁や墓の墓場の供養かな  
午後三時下校電車のよく眠る  
そういえばメーデーだった改元日

